

特集

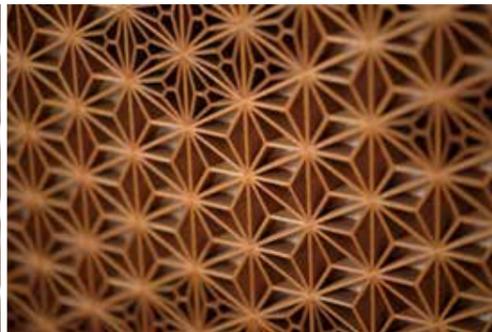
組子細工と文様の世界

精緻を極める職人の技

細く削った木材だけを使い、美しい文様を生み出す組子細工。神栖市には、その最高水準の技術を持つ建具職人がいます。精魂込めて作り上げる思いに迫り、守り伝えていきたい貴重な伝統技術を見つめ直します。



組子細工の衝立を仕上げた渡会建具店3代目渡会利一さん(右)と4代目誠俊さん(左)



日本一に輝いた職人技

皆さんは、組子細工を間近でじっくり眺めたことがありますか？ 組子細工とは、釘などを使わずに、細い木片を組み合わせて幾何学文様を生み出す木工技術です。昔から障子や欄間などの装飾として用いられてきました。今回は、その技術を代々継承してきた堀割地区の渡会建具店を訪ねました。

母屋の和室に案内されて目に飛び込んできたのは、間仕切り戸、欄間、衝立などに施された見事な組子細工の数々。精緻を極めた美しさに圧倒され、一瞬にして職人技の奥深さに魅了されました。

それらを指差しながら、「その組子を作ったのは25歳のとき。もう46

年も前だね」と柔和な表情で話してくれたのは、渡会利一さん(3代目)と誠俊さん(4代目)親子です。2人の組子細工の腕前は、国内でも高く評価されています。父の利一さんは、平成5年の技能グランプリ(第12回一級技能士全国技能競技大会)で日本一に輝き、労働大臣賞を同時受賞。平成18年には卓越技能者「現代の名工」として表彰され、さらに平成21年に黄綬褒章を受章しています。

長男の誠俊さんも、建具技術の最高峰を競う全国建具展示会に出展し、平成14年に上位入賞を果たしました。その作品には組子で最も難しいとされる「干網」という技法が使われ、扇型に広がる網目が流れるような曲線を描き出しています。さまざまな作品を見るうちに、建

具という実用品に手の込んだ組子細工が加わることで、まるで芸術品のような美が創造されることを実感しました。

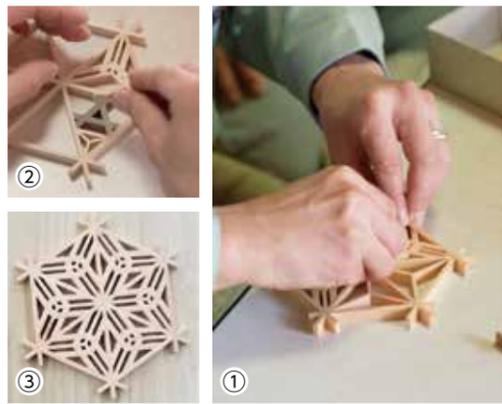
厳選した木材を精巧に組み上げる

一体どのようにしてバラバラの木片から文様を作り上げていくのでしょうか？ 誠俊さんが目の前でコースターを組み込む作業を見せてくれました。細い木片には、すでに何か所も溝が掘られています。

まず、15センチほどの木片を組み立て、6つの正三角形で6角形の地組を作り出します。この地組は三ツ組手と呼ばれる形です。次に、三角形で仕切られた中に「葉」と呼ばれる小さなパーツをはめていきます。微妙に角度を調整しながら指先に力を加

えていくと、すっと収まる瞬間がきます。その作業を繰り返して6つの三角形が全部埋まると、優美な桜の文様が姿を現しました。

木片が接する部分には髪の毛一本ほどの隙間もなく、指先で撫でてみると凹凸がなくてすべすべの手触り



①②6角形の地組を作り、葉と呼ばれる小さなパーツをはめる
③でき上がった桜文様のコースター